信念の人 —— 蕭乾

葉　　紅

二十世紀の中国を生きた知識人蕭乾（一九一〇年～一九九九年）についての研究は一九八〇年代の中頃から今日まで中国国内外で盛んに行われてきた。それは蕭乾本人の一九七九年においての歴史的総決算とも言える「平反」（政治的な名誉回復を経て，文壇復帰が可能になる）により，新たに世間の注目を集めたことは言うまでもないが，その後の彼自身の精力的な文筆活動がその機運を盛り上げた直接的な要因と考えられる。

中国国内においては，蕭乾の全集本から，小説，エッセイ，ルポルタージュのジャンル別の作品集まで各地の出版社から相次いで出版され，読者に歓迎された。『二十世紀作家心態史』[1]，『蕭乾文学生涯六十年』[2] などでは，新聞や雑誌のインタビュー記事，研究者の視点からの論文および作家自身が再度筆を手にした後，新たに書いたエッセイなどを含めた刊行となった。

日本では，丸山昇が蕭乾の『地図を持たない旅人』[3] 著作を翻訳出版し，研究者にはもちろんのこと，蕭乾という中国の知識人を一般向けに紹介した先がけになった。研究分野では蕭乾と老舎の交友関係を切口に分析されたもの，作品を読み解き，生い立ち[4] に着目したもの，さらに作家の伴侶選び[5] に注目し，その内面を見つめようとした試みまで，さまざまな研究が行われてきた。

本稿は，中華人民共和国成立までの，中華民国時代において蕭乾が受けた教育による彼の人間形成および一九四九年以降の新中国の政治的な空気の中で，いかに共産党の呼びかけに応え，当時の時代のニーズにマッチングできるよう懸命に生き，最後には最晩年の「あの帰国の決断についてはこれまで一度たりとも後悔したことはない」[6] の真情吐露に至ったかについて論を進めていくことにする。

幼少期から青年期まで

1－1　生育環境

蕭乾は生まれる前に父親が世を去ってしまったため，生まれた時から，父の顔を知らない母一人，子一人の生活を強いられた。母子二人が生きていくために母親が内職をし，外へ働きにも出ていた。その間，少し年が離れた従姉が代わりに幼い蕭乾の面倒をみたという。その従姉は，沢山の字が読めて，『名賢集』をほぼ丸ごと暗唱できるほど，聡明だったという。蕭乾に歴史小説に出てくる小話を聞かせ，童謡なども教えたという。従姉は「僕の啓蒙の先生だった」[7]

他にもう一人，斉魯大学で学んだ従兄がいて，後にキリスト教に入信し，アメリカ人の女性を終生の伴侶に選んだ。その結婚は当時，周りに大反対され，アメリカ領事館でビザの手続きを拒否され，挙式をしてくれる教会もみつからないほど，大変な騒動になった。後にこの従兄の嫁アンナから，蕭乾が英語やマナーを教わったのだった。

蕭乾の生母は教育を受けたことがなく，字がほとんど読めない女性だった。しかし，彼女の最大の願いは，ひとり息子の蕭乾を学校に行かせることだった。６歳になった蕭乾を私塾に通うようにさせたのだが，貧乏のため月謝が払えず，長くは続かなかったという。それでも，少年は母親の愛情を一身に受けて育てられた。

一方，家庭の外に目を向けると，蕭乾の回想録に当時の北京についての記述は次のようにまとめられている。

真冬の早朝に赤十字の慈善団体が粥の配給をしてくれる。通りで並んで配給を待つ列に地元民に混じってロシア人の姿もあった。それはロシアの十月革命により，帝政ロシアが崩壊し，王侯貴族を始め，その他大勢の使用人も含め，命からがらで逃げてきたロシアの人々であった。彼らの多くは運良く粥を分けてもらえれば，その1日は生き延びられるという厳しい境遇だった。

彼らは地元住民と異なる背格好や外見をしているから，少年蕭乾には特に強いインパクトだったであろう。ある時，数日前に粥の配給のために並んでいたロシア人の男性が通りで亡くなっていたことを少年蕭乾が見つけた。

「検屍官は呟きながら，書類に何やら書き込んでいた。「名前…なし，国籍…なし，親類…なし」書き終わると，二人の男が棺を天秤棒で吊り，城門の方へ担いで行った」[8)]

蕭乾はこの時の思いを次のように綴っている。

「その後，一九四九年に香港でケンブリッジに向かうか，北京に戻るかと考えた時も，この往時の「行き倒れ」が私に決定的な影響を与えた。私は無国籍の放浪者になるのを一番恐れたからだ」[9)]

このようなことは，同時期に上海でも同様に起きていて，『My Twenty Five Years In China』[10)]『「在支二十五年」米国人記者が見た戦前のシナと日本』にも取り上げられている。

「上海に到着したロシア人亡命者の数は，正確には分からないけれども，二万五千人から五万人だと推定されていた。大多数は貧乏だったので，上海では数カ所で無料給食施設を開設する必要があり，地元の慈善団体がその資金を提供した。

難民の中には兵士も多数いた。主に帝政ロシアの軍隊で働き，今でも皇帝に忠誠を誓うコサック騎兵だった。彼らのほとんどがモンゴルを通り抜けて満州へ逃れ，家族を一緒に連れていた。難民の大多数は，ロシアのあちこちの小さな町や村の出身だった。しかし，今でこそ赤貧状態の難民に落ちぶれてはいるものの，以前は欧州ロシアの大地主や，羽振りのいいビジネスマンだったという人たちも，ときたま出会った。

金持ちにしろ，貧乏人にしろ，非識字者にしろ，教養人にしろ，彼らには一つだけ共通点があった。それは，生まれた土地から彼らを追い出し，避難民となることを強い，外国人にすがらざるをえなくしたボルシェビキへの憎しみだった」

その頃は中国に限らず，欧州大陸の各地にもロシア人の難民が身を寄せる場所を探し求めていた時代だった。

1－2　教育環境　ミッション・スクール

ところが，11歳の頃に最愛の母までも亡くし，蕭乾は少年期から一人ぼっちの身となってしまった。幸い，親戚の家に引き取られたが，居候の日々の中で味わった疎外感，劣等感を蕭乾は小説『籬下』（1934年）と『矮檐』[11)]（1936年）に描き，雑誌『水星』と『文学季刊』に寄稿している。その二作品については，拙作「蕭乾が愛した小説ー『籬下』と『矮檐』を読んで」[12)]で取り上げているので，そちらを参照していただきたい。

蕭乾の母親が亡くなる少し前に，働きながら通える「崇実学校」（英語名 Turth Hall）があることを従兄が人づてに知り，その学校なら学費の目処もつくだろうと，蕭乾はそこに通うようになった。その学校は絨毯を作る作業場と印刷所を併せ持ち，羊乳を生産加工するため羊も飼っていた「洋学堂」であった。「洋学堂」は当時「教会学校」とも呼ばれ，ミッション・スクールである。

ここで当時の中国にあったミッション・スクールについて触れることにする。

清王朝の中頃から，各地にキリスト教の伝道士が入り，布教活動がさまざまな形で行われていた。十九世紀の初めになると，プロテスタントの清国

での伝道が盛んになり，それまでと違って，平民布教のスタイルを貫き，口語重視，教育・文書伝道の形を取ることで，庶民への浸透をはかった。当初は清国内での困難さを避けるため，マレー半島のマラッカを拠点に活動を始め，「一八一八年，マラッカに英華書院，三九年，マカオにモリソン学校を創設し，キリスト教原理のほか，中国語や英語，自然科学などを教えた」[13)]

時代が下って，蕭乾が学齢期になった頃，中国のミッションスクールの様子について，彼自身がこんな一節を書き残している。

「英美基督教会在中国办学，似乎曾经过缜密的规划。以大学来说，广州有岭南，上海有沪江和圣约翰，杭州有之江，湖南有湘雅，四川有华西，北京有燕京和协和，全是美国办的。每座大学仿佛都有一座医院。

中学的分布也很有章法。

以北京而论，当时就有好几所这样的洋学堂，各有男女两所学校，每所都由一家教会开办」[14)]

「英米のキリスト教会は中国で学校を作る際，綿密な計画を練ったらしい。大学については，広州には嶺南，上海には滬江とセント・ジョンズ，杭州には之江，湖南には湘雅，四川には華西，北京には燕京と協和があり，どれもアメリカ人の経営である。（原文のまま。筆者）どの大学にも病院が一つ付いているようだった

中学の配置についても殊の外考えがあったようだ。

北京について言えば，当時からそのような洋学校が何箇所もあり，それぞれに男子学校と女子学校を持ち，一つの教会によって経営されていた」（筆者訳，以下同じ）

蕭乾が通った崇実学校はまさにそういう学校であった。

さらに崇実学校で学べたこととそこで体験した宗教への強制的な帰依に関して，こんな記述がある。

「就我个人来说，能进崇实这个洋学堂，大大不同于待在姑子庵里念四书。不论他们的主观意图如何，十九世纪以来教会在华办学，办医院，客观上对中国走向现代化是起过一定作用的。然而不容否认，我在崇实所接受的宗教教育既是原教旨的，也是十足强迫性的。每天早晨要在学校作礼拜，星期天排队到二条礼拜堂，都先点名。我又像背子曰学而那样，背起约翰福音，背起哥林多前书来了。背不上来就挨板子」[15)]

「個人的には，崇実のような教会学校に入れたことは，尼寺（前述の私塾）で「四書」を読むのとでは，大違いだと言わなければならない。彼ら（英米のキリスト教伝道士）の本来の意図は何であろうと，19世紀以来中国で学校や病院を創設したことは客観的に見て，中国が近代化へ進むことに，ある程度の役割を果たしたと言える。しかし，私は崇実で受けた宗教教育は原理主義であり，強制的であったことはどうしても否定することができない。毎日の朝学校で礼拝をしなければならなかった。日曜日には整列して二条にある礼拝堂に行くのだが，必ず最初に点呼があった。

私はまた『子曰く，学んで』を暗誦したようにヨハネ福音書を暗誦し，コリント書を暗誦することになった。それができなければひっぱたかれた。」

中学で学ぶ教科についても次の記述からある程度伺うことができる。

「英文是洋校长教，我有点底子，倒还混得不错，国文我虽比不上那些有家学的，作文倒曾蒙受过李茂青老师在班上夸奖过。上初中后，代数几何就糟不可言了」[16)]

「英語は外国人の校長が教えてくれたが，私は少し基礎ができていたので，それなりにできていた。国語は教養のある家庭の子弟と比べられないが，作文だけは李茂青先生に褒めてもらったこともあ

る。中学に上がってから，数学はもう目もあてられないくらいひどいものになっていた。

ミッション・スクールのおかげで教育の機会に恵まれたことを認め，大いに感謝しながらも，キリスト教の強制に拒否反応を起こし，強い反感を覚えたようである。その気持ちを後年になるまで持ち続けたらしく,「キリスト教そのものを嫌ったのではなく，あまりに強引な押し付けに辟易したのだと思う」と彼は述べている。

1－3　新中国以降のキリスト教

中華人民共和国建国後,社会主義中国成立以来,一般的にキリスト教を帝国主義の手先という位置付けで考えられてきた。

アヘン戦争後の列強による中国侵略がたびたび起こり，その結果，一部の国土の分割支配を強いられた。そういう帝国主義の軍隊の侵略よりも先にキリスト教が伝道の形で入っていたことから，アヘンと聖書という強力な武器により，中国が西の列強諸国に屈辱な目に遭わされた。そのような観点から，毛沢東の新中国では，キリスト教を帝国主義による中国侵略の手先と定義され，研究の対象に取り上げる以前に話題として触れることもタブー視されてきた。

蕭乾が生きた後半生の半分以上がそういう政治的な空気の中にいて，自著の「未帯地図的旅人」や「往事三瞥」でたびたび言及したように，彼自身は幼い頃の宗教への無理強いにより，当時からキリスト教の布教活動に反感を抱き,嫌っていた。それは事実であろう。また，そのようにしか言えなかったであろうことは容易に想像がつく。

『「名人情結」叢書　蕭乾　文潔若』[16] によると，一九五二年人民文学出版社に再配属された蕭乾は本業の創作活動が可能になると，映画の脚本の執筆に取り掛かったという。その脚本は数ヶ月後の配属先の再転換により，世に送り出すことができなかったが，彼はミッション・スクールと孤児院をテーマに選んでいた。そのために彼は天津，南京，北京の孤児院に取材に行き，そこでの生活を体験題材にしようとした。キリスト教と孤児(彼自身をも投影して）というテーマは自分を見つめる上では避けて通れないことはここからも窺い知ることができる。

キリスト教のみならず，およそすべての伝統的な文化を反共産党の悪であって，共産主義と相容れないものと規定されている以上，大っぴらに宗教ないしキリスト教のことを言葉にすることはどれだけ危険なことか，蕭乾に限らず，知識人の誰もが分かっていた。四九年以降の広範囲で絶え間ない政治闘争，文芸批判を経て，たとえ一九七九年の名誉回復が行われ，通常の創作活動が許されたにせよ，またいつ何時にどんな目に遭うか，誰であっても簡単に信じてはいけない自己防衛が常に働いてしまう歳月がまだ続いていた。それを念頭に入れて，当時の発言を聞かなければならない部分がある。

文筆業への道

1－1　「大公報」との出会い

「大公報」は清王朝の末頃（一九〇二年）に創刊し，辛亥革命など時代の変化と共に幾度の変遷を辿り，現在もなお香港で発行している長い歴史を持つ中国の代表的な新聞の一つである。蕭乾が燕京大学の新聞学科を卒業する一九三五年頃，楊振声と沈従文の口利きもあって,「大公報」の入社試験を受ける機会を得た。

創刊当時より営利を目的にせず，政府におもねることなく，民のためを第一にする創刊者英剣之の信念を貫いた「大公報」は，後の文筆家としての自分を育てた「ゆりかご」になったと後年の蕭乾が振り返った時に述べている。紙面の文芸欄を若者の読者向けに内容を充実できる人材を欲しがっていた当時の胡霖社長は蕭乾を高く評価し，一九三五年七月蕭乾が卒業すると,「大公報」に務めるようになった。

胡霖社長が蕭乾の才能を高く買ったには理由が

あった。実は遡って二年近く前から蕭乾は「大公報」のほかに『国聞月報』,『水星』などの複数の雑誌に小説，散文の習作を投稿していた。処女作になった小説の『蚕』をはじめ,「小蒋」,「郵票」,「花子与老黄」[17] といった社会の底辺で苦しむ庶民の日常を題材に描いた作品は大公報の「文芸」欄で発表することができた。小説に対しての評判が上々で，実力が認められていた。

入社した頃の蕭乾が「文芸」欄の「小公園」コーナーを任されたのだが，これには当初蕭乾が気に入らなかったという。当時の「小公園」の紙面は伝統芸能を紹介するか，故実を載せるかで，また実用性からなのか，汽車の時刻表や各種の広告など多岐にわたるが，若い蕭乾がこのむ内容ではなかった。そういう紙面の編集にあたることをためらった蕭乾に対し，胡霖社長は蕭乾独自の感性で紙面を変えることを許し，新たな読者層を開拓するよう励ましたのであった。

「大公报是我走出校门后的第一个岗位，也是我一生工作中最久的地方。它为我提供了实现种种生活理想的机会，其中最主要是通过记者这一行当，广泛接触生活，以从事创作。」

「『大公報』は私が学校の門を出た後の最初のポストであり，私が生涯で最も長く勤めた所でもあった。それは私にさまざまの生活理想を実現する機会を与えてくれたが，その中で最も重要なのは，記者という職業を通じて広く生活に触れ，それを糧に創作に携わったということである」[18]

着任後の蕭乾は「小公園」の刷新に着手した。さまざまな試みを行ったが，中でも良質の文学作品を広く知られるよう作品紹介ー書評の特集を定期的に組んだことが評判をよんだ。老舎の「離婚」,曹禺の「日出」，エドガー・スノーの「活的中国」など相次いで紹介された。同時に蕭乾は現場への取材を希望し，当時山東省，江蘇省などで豪雨による河川氾濫の被害を報道すべく，現地に赴いた。水害による農作物の不作，連鎖して起こった飢饉を蕭乾は目の当たりにした。「魯西流民図」,「大明湖畔啼哭声」,「宿半山麓之哀鴻」[19] など，住処を奪われた上，飢饉に喘ぐ被災民の窮状をルポルタージュに書き，各地からの寄付を募った。

現場での取材を重んじ，常に庶民の目線で報道に関わりたい強い信念をずっと貫かれていた。一九三八年の滇緬公路（英語：Burma Road）（雲南省からミャンマーに延びる道路）の建設時，民工の劣悪な環境と危険な仕事を現地取材し，ルポルタージュにまとめている。

「大公報」は天津以外の上海，香港などでも独自の紙面構成を出す支社を持つようになり，蕭乾もたびたび応援に駆り出され，一九三九年，彼が英国に出発するまで,現場で経験を積んだことで,ジャーナリストとして生涯文筆業に携わる自信を得たのであった。

１−２　第２次世界大戦

蕭乾は第２次世界大戦の期間中を丸ごと欧州で過ごした中国の知識人に稀に見る経歴の持ち主である。

一九三九年，ロンドン大学から講師として迎えたいと連絡が入った時,「大公報」の胡霖社長は旅費とパスポート等の一切の必要書類を用意して，蕭乾にその招聘に応じるように勧めた。この時も気が進まない蕭乾には大戦の開戦に備え，ロンドン大学の安定した仕事をしつつ,「大公報」の特派員として，現地から報道してほしいというのであった。後になってわかったことだが，この胡社長は実は第１次世界大戦時に記者として報道に関わり，より戦場の近くからニュースを報道することの重要性を誰よりも分かっている一人であった。

胡社長の強い後押しもあって，蕭乾は英国に向かう船に乗った。それが大戦開戦の前の日であった。それから7年間彼は中国に帰ることはなかった。

その船上では,さまざまな国の客が乗っていて，みな一様に不安げで苛立っている人もいたという。戦争の先行きが分からず，これから降りかかって

くるかもしれない不運を心配していた。そんな中で,一人の若者だけいやに明るい表情をしていた。蕭乾が理由を聞くと，自分は国籍もなく，親もいない，船を降りたら，フランス軍に加わりたいのだ。そうすれば，少なくともフランス人になれるのだと若者は上機嫌に言った。それを聞いた蕭乾は複雑な気持ちになり，少年時代に見た「行き倒れ」のロシア人のことを思い出し，この青年も祖国を持っていないのだと心の中でつぶやいた。

それから在英の七年間は，ロンドン大学の教員をつとめたほか,ケンブリッジ大の大学院に入り，後にも触れる在学中，一教授と一学生との書物に巡っての対等な議論など，当時としては得難い経験をした。戦時中の英国をつぶさに観察し，ロンドン大爆撃にもあった。そして，論文をまとめ，もうすぐ学位を取れる頃に今度は胡霖社長が記者に戻るよう，勧めてきたのだ。学位などよりも現実の世界に目を向けることの重要性を説いた。説得された蕭乾は前線に向かい，フランス，ドイツを回り，サンフランシスコで連合国全体会議が開かれると聞くとまたアメリカにも向かった。

人生の岐路

１−１　女性党員−楊剛

少しだけ年上の楊剛は蕭乾のことを弟のように気にかけていた。燕京大学の同期生であったこともあって，常々，きちんとした人生設計をするよう蕭にアドバイスをした。楊剛については拙作「蕭乾と楊剛ー蕭乾の作品を手がかりに」[20] で詳しく取り上げているので，参照していただきたい。

才気にあふれ，鋭い洞察力を有した楊剛は共産主義を信じ，共産党のためなら，身の危険を顧みず，まっしぐらに突き進む女性であることを残された作品から伺うことができる。燕京大に在学中，彼女は共産主義の理論を蕭乾に聞かせ，しっかりしたビジョンを持って人生の道を歩むべきだと諭すのだが,「私はむしろ，自由気ままにこの世界を見て歩き，自然に任せて見聞を広めたい」と蕭乾が答えたという。前述の蕭乾晩年の回顧録「未帯地図的旅人」（地図を持たない旅人）というタイトルはここで交わした会話がベースになっていて，また，蕭乾の一生を凝縮した言葉のように思えてくる。

楊剛は一九四〇年から四年間アメリカに留学し，在米中，アメリカの農家を訪ね歩き，当時のアメリカ社会が抱える問題を現場から発信し,後に『美国札記』[21] にまとめられている。「大公報」のアメリカ特派員になり，アメリカを紹介する記事を「大公報」に載せた。一九四九年，中国共産党が中華人民共和国を誕生させようとした時，ケンブリッジ大学の教職を保証された蕭乾の向かう先は中国か，英国かと人生の岐路に立たされていた。この時にアドバイスしてくれた多くの人の中に楊剛もいた。新中国成立後，彼女才能や仕事ぶりは高く評価され，後に共産党の要職についた。

１−２　帰国の決断

一九四九年八月，蕭乾は香港から，青島を経由して北京東駅のプラットホームに降り立った。「とうとう帰ってきた」と心の中でつぶやいたという。共産党が勝利を収めた新中国に３９歳の働き盛りの蕭乾が力を尽くしたい，やっと平和を迎えた祖国で心置きなく働くことができる喜びで胸がいっぱいだったという。

一方で気がかりなこともあったという。それは帰国への迷いではなく，共産党が自分のような長年海外で暮らした知識人をどの程度信頼し，仕事をさせてもらえるか，確信が持てなかったのだ。

一九四七年に上海「大公報」で蕭乾は当時の過度の年功序列について意見を述べる記事を書いたことがある。「称老称公」（年齢や経歴を鼻にかけてお高くとまること）の気風は毛沢東の新中国の文芸界にそぐわず，改めるべきだという要旨であった。

ところがこの記事について当時ではすでに長老と自認し，少なくとも表面上公認されていた文芸

界の重鎮である郭沫若の機嫌を大いに損ねてしまった。その翌年にその記事を理由に蕭乾は攻撃を食らってしまうのであった。朱光潜，沈従文と共にやり玉に挙げられ，蕭乾は黒い色に喩えられ，憎悪の矛先を向けられたのである。

後々になって，長い海外生活であまりに中国国内のことが疎くなり，加えて，自分の性格もあって，あんな文章なんて書かなければよかった，まったく書く必要なんてなかったと蕭乾自身が述べている。

しかし，帰国の当初は気がかりとして心の奥底にしまい込むしかなかったのだ。

ただ，蕭乾が９歳から，従兄のアメリカ人の妻から，英語を教わり，その言語に基づく文化に接してきたことは前に述べた通りである。後のミッション・スクールの崇実学校，燕京大学，輔仁大学など，卒業しなかったり，途中からツテで入ったりしていたにせよ，どちらもキリスト教の布教活動の一環で開いた学校で，当然キリスト教一色に染まっていた。そういう空気の中で彼が教育を受けたのである。

さらに彼が３５歳から４２歳までの人生の思想形成のもっとも重要な時期に，英国で暮し，中国の同時代のほとんどの知識人よりも長い間，英語を学びや暮しの言語として使用し，キリスト教文化の中にいたことは明らかである。その言語が指向する水平方向の人間関係の構築スタイルに蕭乾が染まっていたこと容易に想像がつく。

ケンブリッジ大学の大学院での学びについて，「ケンブリッジでの勉強は，授業に出て講義を聞くというのは二次的なもので，それぞれの学生には指導教官がいた。指定された学生もいれば，自ら門下に入った学生もあった。

指導教官は各々二,三名の学生しか担当しない。毎週一，二回決められた時間に，ふつうは午後のお茶の時間に，先生と弟子は思い思いにソファーに腰を下ろす。先生が講義し，それを学生が聞くのではなく，先生はヒントや指導（例えばこれこれの本を読みなさいとか）を与え，学生はその週に自分が書いた小論文を読み上げるのだ。学生は質問したり，自分の観点を述べたり，また指導教官ととことん意見を戦わせたりするよう激励される。これはかなり贅沢な教育法だったが，思考ルートを拓き，独創的見解を大いに導き出すことのできる最もよい方法でもあった」[22] と振り返っている。異国の地でのこのような指導方法を新鮮に思えても，生来物怖じしない性格の蕭乾はすぐに受け入れ，楽しんだだろうと推測できる。師弟関係にあっても，おのおのの見解を何一つはばかることなく，述べることができた。それがごく自然で，あたりまえであった。

この「称老称公」事件が長く尾を引き，たったの４文字で後の何年にもわたって，批判されつづけ，重い荷物を背負わされることになった。

１－３　生涯の伴侶–文潔若

一九五四年に蕭乾は文潔若と結婚した。自分たち二人の結婚は「文字による交わり」であると表現している（広義においての文筆業によって結ばれた)。互いにこよなく本を愛し，文筆業を生涯の天職にする共通点をそのように表現したのである。

すでに二度の結婚に失敗している蕭乾は，今度こそ「私にもとうとう家庭ができた」と妻に囁いたという。

清華大学の英文科を卒業して間もない文潔若は読書人の家柄もあって，既婚歴の蕭乾に当初母親が蕭乾との結婚について,縦に頭を振らなかった。それでも文潔若の意志は固かった。

しかし，その頃から中国共産党内では政治闘争の暗雲が立ち込め，まもなく下々の庶民の生活をも脅かすようになるのだった。

共産党による反右派闘争に続き，知識人の思想改造と称して，全国の隅々まで巻き込んだ闘争が一九七九年まで続いた。その間，蕭乾は一切の創作活動から退かれ，ペンを取ることを許されなかった。一度は死を考えた蕭乾だが，妻文潔若の強い支えで，二人で揃って生き抜くことを誓いあった。中国を愛し，中国人民に尽くしたい自分らが何の罪も犯していない。何一つ死ぬ理由はない。

死ななければならないのは悪事を働いた人たちであって，自分たちではない，そう言って妻が蕭乾を励ましたのであった。

終わりに

一九七九年の「平反」を経て，蕭乾はようやく安心して机に向かうことができた。その時期の精力的な執筆活動により，蕭乾にとりまく世界，その交友，そして知られずに埋もれたままになった多くの真実が世に明かされた。国内外のかつての交友の好意により，蕭乾夫妻はかつての学び舎，住まいを再度訪れるチャンスを持ち，古い友人に数十年言えなかった礼を直接言えた。彼にとってどれも思索の旅になったことは，いまではその遺稿から読み取るしかわれわれに残された方法がない。

あまりに苦しく，辛い時期に蕭乾の頭に死がよぎったことはあったものの，それでも中国が歩もうとした道を一度も疑うことがなかった。中国共産党の党内闘争が全国の十数億人を巻き込み，数十年の代償を払わされる結果になったが，蕭乾はそれでも帝国主義の諸国の列強に塗炭の生活を強いられてきた国を平和に導く中国が目指した方向に間違いがないと確信したのである。

注

1)『二十世紀中国作家心態史』　楊　守森　中央編訳出版社　1998年

2)『蕭乾　文学生涯六十年』　傅　光明　鷺江出版社　1995年

3)『地図を持たない旅人』丸山　登　江上　幸子　平石　淑子　花伝社　1993年

4)『文革大革命に到る道　思想政策と知識人群像』丸山　昇　岩波書店　2001年
『「文革」の軌跡と中国研究』　丸山　昇　新日本出版社　1981年
『文革大革命に到る道　思想政策と知識人群像』丸山　昇　岩波書店　2001年
『「文革」の軌跡と中国研究』　丸山　昇　新日本出版社　1981年

5)『新中国を生きた作家　蕭乾』 岡田　祥子　幻冬社ルネサックス　2009年
「作家蕭乾を育てた三人の母」　岡田　祥子　法政大学教養部「紀要」122号
「蕭乾の繰り返された結婚と離婚」岡田　祥子　法政大学・言語文化センター「言語と文化」２号

6)『往事三瞥』 蕭　乾　　江蘇文芸出版社　2010年

7）8）9）　注３）を参照

10)『My Twenty Five Years In China』　JOHN B. POWELL　　The Macmillan Company　1945
『「在支二十五年」米国人記者が見た戦前のシナと日本』 ジョン･B･パウエル　作　　中山　理　訳　祥伝社　2008年

11)『蕭乾全集　第一巻　小説巻』　湖北出版社　2005年

12)「蕭が愛した小説『籬下』と『矮檐』を読んで」『駿河台大学論叢』32号　拙作

13)『世界歴史大系　中国史』５　松田道雄　山川出版社　2002年

14)　注３）参照

15)　注６）参照

16)　『「名人情結」叢書　蕭乾　文潔若』　丁亜平

中国青年出版社　1995年

[17]『蕭乾全集　第一巻　小説巻』　湖北出版社　2005年
[18]『大公報与中国現代文学』　劉 淑玲　河北教育出版社　2004年

[19]『蕭乾全集　第一巻　散文巻』　湖北出版社　2005年

[20]「蕭乾と楊剛ー蕭乾の作品を手がかりに」　『駿河台大学論叢』30号　拙作

[21]『美国札記』　楊　剛　湖南人民出版社　1983年

[22]　注６）参照

〈その他の参考文献〉

『沈从文与「大公报」』 杜　素娟 山東画報出版社　2006年
『アジアの戦争　日中戦争の記録』　エドガー・スノー　作　森谷　巌　訳　筑摩叢書　1988年
『一个中国记者看二战』蕭乾　　生活・読書・新知三聯書店　2015年
『二十世纪中国女作家研究』 阎　德純　　北京語言文化大学出版社　　2001年
『蕭乾　名作欣賞』 肖風 中国和平出版社 1998年
『未带地图的旅人　蕭乾回忆录』 蕭乾 江蘇文芸出版社　2010年
『大公報史』　周 雨　江蘇古籍出版社　1993年
『「大公報」百年史』　方 漢奇　中国人民大学出版社　2004年
『生机無限』　文潔若　北京十月文芸出版社　2003年